

令和 6 年 6 月 2 8 日現在

機関番号：23803

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12829

研究課題名（和文）P・クロボトキンのアナキズム思想の系譜学とその想像力の射程 翻訳と横断

研究課題名（英文）P. Kropotkin's Anarchist Genealogy and Imagination: Translation and Transversality

研究代表者

小田 透（Oda, Toru）

静岡県立大学・その他部局等・特任講師

研究者番号：50839058

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：P・クロボトキンの主著にして、彼の領域横断的で翻訳的な知の結節点ともいえるべき『相互扶助論』（1902）の新訳の刊行が、本研究の最大の成果である。『相互扶助論』は、そのような横断性や翻訳性ゆえに、依然として批判的校訂版と言えるものが存在しないテキストだが、1902年初版、1904年改訂版、1914年廉価版を比較検討するとともに、デジタルアーカイブを駆使し、脚注の参考文献を精査することで、学術的に精度の高い翻訳を作成することができた。また、『相互扶助論』の同時代的な影響や、その現代的な意義、または、そこから派生した問題をめぐって、6つの国際学会で発表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

クロボトキンの『相互扶助論』（1902）は、ダーウィンの進化論の解釈をめぐる書物であると同時に、19世紀後半の人類学や歴史学の知見を総合する著作でもあれば、現代におけるウェルビーイングやケアについての議論を先取りするテキストでもある。そして、その歴史的かつ現代的な重要性にもかかわらず、大杉栄による100年以上前の翻訳を除けば、長らく絶版の状態にあった。本研究の成果として刊行された新訳は、この隙間を埋めるものであり、19世末の思想史や文化史の研究者のみならず、現代における社会運動にかかわる人々に、新たな参照点となるだろう。

研究成果の概要（英文）：The major research achievement is the new translation of *Mutual Aid*, which is arguably P. Kropotkin's most influential work and embodies his interdisciplinary and translational thinking in a paradigmatic way. Perhaps because of its transversal and polyglot nature, no critical edition has not yet appeared, and to do a new translation of *Mutual Aid* meant to thoroughly compare the three existing editions (1902, 1904, and 1914), examine the original footnotes, and delve into digital archives. In addition to the establishment of a reliable edition of *Mutual Aid* and the publication of the new translation based on it, this research project succeeded in presenting its major findings in six international conferences, discussing the historical, global, and contemporary significance of Kropotkin's thinking on mutual aid.

研究分野：思想史

キーワード：クロボトキン アナキズム 相互扶助 翻訳

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の理論的背景をなしていたのは、アナキズムの定義をめぐる問題であった。「アナキズム」に内包されている否定性——an という否定の接頭辞をもつ ism——をどのように引き受けるか、とくに、「アナキズム」という名で呼ばれるものが、テロ行為から労働運動まで、個人主義から共同体主義まで、伝統的な生き方からユートピア的な可能性まで、さまざまな領域に出現していた19世紀末において、アナキズムをどのようにして研究領域・対象として確立することができるのかという問いであった。

このような着想の直接の出所は、2016年にカリフォルニア大学アーバイン校比較文学科に提出した博士論文 *Anarchistic Hermeneutics of Utopian Desires in the Late Nineteenth Century: Defining, Narrating, and Reading Anarchism* であったが、19世紀末アナキズムの世界的拡散にたいする関心は、2006年に東京大学大学院総合文化研究科超域文化学専攻（表象文化論）に提出した修士論文——大西洋を渡ってアメリカでアナキストとして活躍したロシア系移民エマ・ゴールドマン（1869-1940）についての文化史的考察——にさかのぼるものであった。その意味で、本研究は、過去10数年にわたる学術的関心の総括の試みであった。

## 2. 研究の目的

そのような長きにわたる関心を背景とする本研究が目したものは、19世紀末から20世紀初頭における最大のアナキズム思想家であるP・クロボトキン（1842-1921）であった。ロシアに生まれながらフランスやイギリスに長く滞在し、地理学を修め、生物学に傾倒し、人類史的視点から歴史を叙述し、政治経済学から文学から倫理学までを縦横無尽に論じたクロボトキンは、複数の知的伝統や新たな学問的・言語的实践がせめぎあう19世紀末から20世紀初頭の世紀転換期の世界において、母国語ではない英語やフランス語で執筆することを選んだ外国語作者でもあり、上記のような大きな問いに取り組むには理想的といえる対象であった。

本研究は、世紀転換期のアナキズムの複数性や多層性を分析的かつ統合的に論じるという目的を達成するために、「翻訳」と「横断」というキーワードを手がかりとし、比較論的視座に立つことで、クロボトキンの領域横断的なアナキズムが体現しようとしていたラディカルな思想の系譜学を描き出し、その批判的な想像力の射程を浮き彫りにし、その思想史的影響圏を明らかにすることを目指したのだった。

## 3. 研究の方法

本研究にとって、「翻訳」と「横断」は、主題であると同時に方法論であった。ここで「翻訳」は、狭義と広義の二重の意味で捉えられていた。世界文学的なパラダイムに立つ本研究において、「翻訳」は、ある言語から別の言語への移し替えという狭義の言語的意味で用いられもするが、それは同時に、ある知的伝統から別の知的伝統へ、ある文化的文脈から別の文化的文脈への書き換え、書き直し、書き加えといった広義の問題系を名指す用語でもあった。

この広義の意味での「翻訳」において、もうひとつのキーワードである「横断」が交わっていた。「横断」もまた、ロシアからシベリアや満州やフィンランドへ、スイスやフランスからイギリスへとといった地理的に物理的な移動という具体的な意味でも用いられていたが、同時に、生物学から人類学や民俗学、人類史から近代史、政治経済学から倫理学といった領域の往還という抽象的な意味のほうが、本研究にとってはより本質的なものであった。

#### 4．研究成果

系譜学的な思想研究をその主要な領域とし、テキストの解釈学的精読をその主要な方法論とする本研究には、出版されているテキストの読解のみならず、ロシアや西欧のアーカイブを訪問し、クロポトキンの未刊行の手紙や草稿、19世紀末から20世紀のアナキズムの1次資料を渉獵することが当初の計画に含まれていたが、それらは、2020年以降のCOVID-19の世界的流行と、その余波としての教育関連業務の増加によって、大幅な変更を迫られることになった。その結果、とりわけ最終年にかけて、研究の中心は、アーカイブ研究をつうじたクロポトキンのアナキズム思想の横断性と翻訳性の研究から、クロポトキンの横断的で翻訳的なアナキズム思想の日本語への翻訳へと大きくシフトしていった。

本研究の最大の成果にしてその集大成は、クロポトキンの主著『相互扶助論 進化の一要因』（1902年）の新訳の刊行である。チャールズ・ダーウィンの進化論から、利己的な個人主義者たちによる闘争というホブズ的世界観を引き出すトマス・ハクスリーの解釈に異を唱え、競争に匹敵する、それどころか、それをさえしのぐ進化の要因として協力を掲げ、動物にも人間にも、過去にも現在にも、未開社会にも現代社会にも普遍的に存在する相互扶助の感性和実践 とそれらの漸進的拡大と複層化 を論じた『相互扶助論』には、1890年から96年にかけて英国の総合雑誌『19世紀』に連載した8本の論文版、1902年の初版、1904年の改訂版、わずかに改訂をほどこし補遺をカットした1914年の廉価版があるが、学術的に校訂された版はいまだ存在しないといえる。今回の新訳は、1904年版を底本としながら、1914年版での改訂箇所も部分的に取り入れ、英仏独露の種々のデジタル・アーカイブを利用することで原著の誤植や参考文献の誤記を取り除いた学術性の高い翻訳である。近年の注目すべきイタリア語新訳（2020年）にも助けられ、本文と原注に登場する人名をほぼ網羅した人名索引も作成することができたし、『相互扶助論』の現代的意義を増幅させようとするPM Press版（2021年）をさらに拡張した事項索引と、50頁におよぶ「訳者あとがき」は、クロポトキンの相互扶助の思想の影響圏を読み解くための今後の礎となるはずである。

クロポトキンの相互扶助の思想の領域横断性とその系譜をめぐる研究成果の一部は、2024年にカナダのモントリオールで開かれたアメリカ比較文学学会（ACLA）において発表した。「P. Kropotkin's Blind Spots, or Anthropocentric Possibilities of Mutual Aid across the Biosphere」と題された口頭発表は、『相互扶助論』において傍論的に言及される「乾燥化」の問題 それは、気候変動が人類の文明に与える影響を論じた箇所である を出発点としながら、クロポトキンの思想における地理学的な主題と生物学的な議論の交錯をたどることで、相互扶助をめぐるクロポトキンのテキストにおける植物の生の相対的な不在を前景化するとともに、現代の人新世の環境哲学との共振 惑星上の生命の相互依存性と、反省的な自己意識の非対称性 を浮き彫りにすることで、『相互扶助論』の現代的可能性（とその限界）を可視化させようとする試みであった。

研究ノート「グレーバーとクロポトキンをつなぐもの 相互扶助の倫理的感性」は、2021年に表象文化論学会のニューズレター『REPPE』Vol. 41に発表したものだが、それは、現代の人類学、19世紀末から20世紀初頭の生物学-人類学的な想像力の交錯を可視化する試みであった。

「相互扶助」という感性／実践／思想を、故デヴィッド・グレーバー（1961-2020）の人類学的な思索に連なるものとして提示すると、クロポトキンの思想の究極的な射程が、狭義のアナキズムを越えたところで、相互扶助を自由な倫理にまで推し進めていくことにあったことを明らかにすることができた。

『相互扶助論』の ひいては、クロポトキンの 日本における翻訳と受容については、ク

ロポトキン没後百年を記念して開かれた 2021 年の国際学会「Pëtr Kropotkin--Activism and Scholarship」を含めて、3 つの国際学会で発表することができた。最初の邦訳者である大杉栄の翻訳活動に焦点を当て、1920 年代末の春陽堂『クロポトキン全集』の射程を検討するとともに、大杉自身のアナキズム論をたどることで、アナキズムの翻訳は、ホルヘ・ルイス・ボルヘスが「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」で示唆していることに似ているのではないかという仮説を提出することができた。すなわち、アナキズムの「翻訳」 字義的な意味でも、比喩的な意味でも において前景化されるのは、翻訳される内容の新規さというよりも、ある特定の歴史的時間、ある特定の地理的空間における、ある種の真実の（再）発見＝（追）体験ではないかという仮説である。

クロポトキンの思想の同時代的な共振については、フランスの自然主義小説家エミール・ゾラ（1840-1902）の『ルーゴン・マッカール叢書』における友愛の主題をたどった研究を、ゾラと自然主義をめぐる 2022 年の国際学会（AIZEN）において発表することができた。翻訳と横断という方法論を、アナキズム研究や 19 世紀末研究というもともとの領域を越えて、現代日本文学どころか現代世界文学を代表する複言語作家である多和田葉子（1960-）にも適応していく可能性を探るという試みは、2023 年のヨーロッパ日本研究協会（EAJS）で発表することができた。また、『相互扶助論』の翻訳と平行して進めていたマーティン・ヘグルンド『この生 世俗的信と精神的自由』の共訳の仕事は、相互扶助と世俗性の関係を考え直す契機ともなり、その成果は、『相互扶助論』の「訳者あとがき」にも反映されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小田透	4. 巻 41
2. 論文標題 グレーバーとクロボトキンをつなぐもの--相互扶助の倫理的感性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 REPRE	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Toru Oda
2. 発表標題 P. Kropotkin's Blind Spots, or Anthropocenic Possibilities of Mutual Aid across the Biosphere
3. 学会等名 American Comparative Literature Association (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Toru Oda
2. 発表標題 Language Learning as a Utopian Project: Tawada Yoko's Post-Disaster Trilogy
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Toru Oda
2. 発表標題 Precarious Narrative Protest: Toward Fraternal Humanity in Les Rougon-Macquart
3. 学会等名 Association Internationale Zola et Naturalisme (国際学会)
4. 発表年 2022年

1．発表者名 Toru Oda
2．発表標題 Sakae Osugi Translating Peter Kropotkin: Anarchist Contestation of Human Nature in Global Intellectual Communication
3．学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4．発表年 2021年

1．発表者名 Toru Oda
2．発表標題 Translation as a Divided Inheritance in Early-Twentieth-Century Japan: Sakae Osugi 's Contrapuntal Reading of Kropotkin
3．学会等名 Petr Kropotkin--Activism and Scholarship (国際学会)
4．発表年 2021年

1．発表者名 Toru Oda
2．発表標題 Translating Anarchism in Early Twentieth-Century Japan: Sakae Osugi Reading Peter Kropotkin
3．学会等名 American Comparative Literature Association (国際学会)
4．発表年 2021年

1．発表者名 小田透
2．発表標題 コロナ時代に希望はあるか      グレーバーからクロボトキンに遡る「相互扶助」の系譜
3．学会等名 日本未来学会（招待講演）
4．発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1．著者名 ピーター・クロボトキン	4．発行年 2024年
2．出版社 論創社	5．総ページ数 516
3．書名 相互扶助論--進化の一要因	

1．著者名 マーティン・ヘグルンド	4．発行年 2024年
2．出版社 名古屋大学出版局	5．総ページ数 -
3．書名 この生--世俗的信と精神的自由	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------